



ニックリッシュの『経営経済学の研究』 についての一考察

牧 浦 健 二

概要 本稿は、1921年に出版され、1925年に改訂版が出された、『経営経済学の研究』(Vom Studium der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1921.)に基づいて、ニックリッシュによる、商科大学卒のビジネスマンに対する教育と彼らの経営活動に対する取り組み方の指針を検討する。ここで、彼が主張する、4つの命題を簡条書きにすると、以下のようになる。すなわち、1. 関連(Zusammenhang)を研究すべきである。2. 経営のための共同研究では、他の科学よりも経営経済学を強調すべきである。3. 経営経済学の学徒は体験すべきである。4. とにかく、ビジネスマンの技術に支配されながら、学ぶべきである。なお、われわれは、「商学士のビジネスマン」(Diplom-Kaufmann)を、本稿では、「商科大学卒のビジネスマン」と訳したが、ニックリッシュの主張は、今日のわが国の経営学部と商学部の卒業生にも妥当するものと考えられる。

キーワード ニックリッシュ, 経営経済学, 商科大学での教育

原稿受理日 2010年12月26日

Abstract This paper writes on the book, that was published by H. Nicklisch in 1921, and had the title “Vom Studium der Betriebswirtschaftslehre”, in English, “On the Reserch of Business Economy”. This book was revised in 1925. In this book, H. Nicklisch studied up on how students have the educations in commercial colleges, and after graduation, they deal with business actions. He made 4 propositions. First, they must meet in focus on the connections between the business actions. Second, they have to give more emphasis on business economy than other economic aproachs, when they work in collaboration for business researchs. Third, they must go through business actions. Fourth, they have to act under business technology. His propositions are available for our graduates from commercial and business course.

Key words H. Nicklisch, Business Economy, Education in Commercial College

はじめに

ニックリッシュは、1902年から1904年まで、銀行で実務経験をした後、ライプツヒ商科大学で恩師ビュッヒャー（Bücher, K.）の下で講師をしながら、研鑽し、1911年に、マーンハイム商科大学の教授になり、1921年にベルリン商科大学の教授に招聘され、1922年から1926年まで学長に就任した⁽¹⁾。

ところで、周知のように、ニックリッシュは、1912年に、『一般商事経営学』（Nicklisch, H.:Allgemeine kaufmännische Betriebslehre als Privatwirtschaftslehre des Handels (und der Industrie), Leipzig 1912.）を出版し、1922年に、第5版として改訂した、『経済的経営学』（Nicklisch, H.:Wirtschaftliche Betriebslehre, 5.Aufl., Stuttgart 1922.）を出版し、1929年から1932年に、第7版として改訂した、『経営経済』（Nicklisch, H.:Die Betriebswirtschaft, Stuttgart 1929/1932.）を出版した。この改訂の過程は、彼による経営経済学の体系化の過程であり、商科大学に基幹科目として経営経済学を樹立するために、他の諸学からの攻撃に対して反論する過程を反映していた⁽²⁾。また、彼の教職歴から見て、彼の主著の改訂の過程が教授の就任と移籍に重なっていることにわれわれは注目している。

しかし、彼の問題意識を明らかにするには、このような考察ではなくて、他の著作とともに、1903年から1938年までに、執筆された、およそ120編の雑誌論文、寄稿論文や辞典項目などを検討しなければならない⁽³⁾。このような検討は、浅学非才の身には、かなり困難な作業であるが、とりあえず、著作に限定して、概観すれば、第一次世界大戦前（1914年7月14日～1918年11月11日）では、ニックリッシュの関心は、銀行での実務経験から、後にいわゆる静的貸借対照表論に結実する「経済的均衡」と「資本の集中」にあり、前者の研究として、1903年に『貿易収支と経済的均衡——国民経済学的研究』（Handelsbilanz und Wirtschaftsbilanz, Nationalökonomische Studien, Magdeburg 1903.）、後者の研究として、1909年に『カルテル論』（Nicklisch, H.:Kartellbetrieb, Leipzig 1909.）が出版された⁽⁴⁾。そして、1912年に、『一般商事経営学』が出版されたが、その目的意識は、前年、つまり、1911年に出版された、『商科大学における商業学の展開』（Nicklisch, H.:Die

(1) 参照。市原季一著『ニックリッシュ』同文館 1982年 5頁

(2) 参照。市原季一 1982. 7頁

(3) 参照。市原季一 1982. 7頁

(4) 参照。吉田和夫著『ドイツの経営学』同文館 1995年 69-70頁；拙稿「ニックリッシュの『カルテル経営論』についての一考察」関西学院商学研究 第6号 1977年 1-15頁

Entwicklung der Handelswissenschaften an den Handelshochschulen, Leipzig 1911.) から、彼自身の言葉により、われわれは検討できた⁽⁵⁾。

第一次世界大戦中には、ニックリッシュは、1915年に、マンハイム商科大学の学長として、「商科大学の必要性と経営経済学の防御」を目指す、有名な講演「利己心と義務感」(Rede über Egoismus und Pflichtgefühl, in: Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis, Heft 5, August 1915, 8. Jahrg., S.101-104.) を行った⁽⁶⁾。そして、1920年に、『組織 向上の道』(Der Weg aufwärts! Organisation, Versuch einer Grundlegung, Stuttgart 1920.; 参照。鈴木辰治訳『組織 向上の道』未来社 1975年) が出版されたが、1912年から「組織の問題」に彼は取り組んでいた⁽⁷⁾。

ところで、第一次世界大戦後、ニックリッシュは、「経営経済学の内容の充実」と「商科大学卒のビジネスマンの養成」に積極的に取り組んだ。彼は、前者の「経営経済学の内容の充実」のため、1922年に『一般商事経営学』を改訂し、第5版として『経済的経営学』を出版し、『組織 向上の道』を改訂し、第2版として同著を出版し、1923年に、『経済的経営学』を改訂し、第6版として同著を出版した。われわれは、『経済的経営学』と『組織 向上の道』の改訂が相互に繰り返されたことに注目し、最大の原因は、『組織 向上の道』で展開された理論が、いわゆる「組織一般論」であり、「経営組織論」ではなかったことにあるとみなしているが、両著の主張が統合された、経営経済学の草稿として、1928年に出版された『経営経済原理』(Nicklisch H.: Grundfragen für die Betriebswirtschaft, Stuttgart 1928.; 参照。木村喜一郎訳『経営経済原理』文雅堂 1930年) に注目している⁽⁸⁾。

なお、本稿は、1921年に出版し、1925年に改訂版が出された、『経営経済学の研究』(Vom Studium der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1921.) を検討するが、われわれに、有益な示唆、具体的には、ニックリッシュが主張する、商科大学卒のビジネスマン(Diplom-Kaufmann)〈【著者補足】われわれは、現在の経営学部と商学部の卒業生に相当する者として、本稿では、このように訳すが〉に対する教育と彼らの経営活動に対する

(5) 参照。拙稿「ニックリッシュによる『商科大学での商業学の展開』についての一考察」近畿大学商経学叢 第57巻 第2号 2010年(2010b) 359-378頁

(6) 参照。森 哲彦訳「ニックリッシュ 利己心と義務感」『研究紀要』(名古屋市立女子短期大学) 1996年 11-20頁; 渡辺 朗訳「利己主義と義務感」(大橋昭一編著・渡辺 朗監訳『ニックリッシュの経営学』同文館) 1996年 115-124頁; 吉田和夫1995. 19-20頁

(7) Vgl. Nicklisch H. (1922b): Der Weg aufwärts! Organisation, Versuch einer Grundlegung, 2. Aufl., Stuttgart 1922. Vorwort III; 参照。鈴木辰治訳『組織 向上の道』未来社 1975年 3頁; 森 哲彦稿1996. 11頁; 吉田和夫1995. 21-23頁; 拙稿「ニックリッシュの『組織論』についての一考察」近畿大学商経学叢 第57巻 第1号 2010年(2010a) 145-179頁

(8) 参照。拙稿「ニックリッシュの『経営経済原理』についての一考察」近畿大学商経学叢 第56巻 第2号 2009年 893-924頁

取り組み方の指針を示唆するものとみなしている。なお、1920年に出版され、1926年に再版された小冊子『商学士』(Der Diplom-Handelslehrer, Stuttgart 1920.)と同様、ニックリッシュのベルリン商科大学での抱負を窺わさせる内容となっている⁽⁹⁾。以下、ほぼ全訳の形で紹介する。

I

私【著者補足】ニックリッシュがここで経営経済学の研究について語るのは、個々の聴衆の特殊な要求に応じて、彼らに助言を与えるために、行うのではない。このような助言を始めるには、助言者が個々の学徒の要求 (Studentbedürfnis), また、彼が既に自らに対して行った、訓練 (Schulung), 人格形成活動 (Bildungsarbeit) のやり方 (Art) と成果 (Ergebnis) について知っていることが前提になる。全体に向けられた講演、全ての学徒 (Studentenschaft) とその仲間を前にしてこれから語られる談話 (Ausführung) にとり、このような前提は途方もないことである。このため、このような助言は学徒の相談部局 (studentisches Beratungsamt) の活動と大学教官の相談行為に委ねられるべきである。今日のような講演では、基本的には、経営経済学の研究の問題に対する態度 (Stellung) のみが決められる。また、これが行われるべきである⁽¹⁰⁾。

まず、問題にされるのは、科学 (Wissenschaft) に関係している。経営経済学 (Betriebswirtschaftslehre) は、新しい展開の20年間において、繰り返して、名称変更を経験してきた。それは、「商業学」(Handelwissenschaften) の名称下で始まり、その後、「私経済学」(Privatwirtschaftslehre) となり、続いて、経営学 (Betriebslehre) と経営科学 (Betriebswissenschaft) を経て、急に普及した「経営経済学」(Betriebswirtschaftslehre) の名称になった。このような名称変更の過程は内部の発展の経緯を反映している⁽¹¹⁾。

ところで、商業学 (Handelwissenschaft) のコア (Kern) では、「事例」(Fall), つまり、個別事例 (Einzelfall) が問題にされる。常に、「何が事例に対してさらに (nun

(9) この点、ニックリッシュが、「人間の自由に基づく人類の解放とドイツの統一を実現する手段として、国民教育を重視した、フィヒテ (Fichte, J. G.) に影響されているならば、当然、経営経済学の諸学からの独立と統一を実現する手段として、人材育成、特に、商科大学卒のビジネスマンの教育を重視していたと推論できる」(森 哲彦稿1996. 11頁; 参照。玉川大学編『フィヒテ ドイツ国民に告ぐ』1954.) とみなされているが、この人材育成という使命感は、既に、1911年に出版された、『商科大学における商業学の展開』という小冊子において、彼自身の言葉により、明記されていることをわれわれは確認している (参照。拙稿 2010b. 362頁)。

(10) Vgl. Nicklisch, H.: Vom Studium der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1921. S.1.

(11) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.1-2.

noch) 存在するのか」という問いが強調される。従って、この場合には、以前に比べた進歩が答えにはある。それから、各個別事例では、「どのように処理できるのか」という別の問いが答えられる。このようにして一連の処方箋 (Rezept) に到達し、この内一つが最善なものとして推薦される。私〈【著者補足】ニッケリッシュ〉は、このように処理された事例を「個別事例」と呼ぶ。これらの取り扱いはいくつこのような意味で行われる。個別事例を「ビジネスの過程」(Geschäftsgang) に纏め、簿記の慣行では、決算に要約されることは、このような主張と矛盾しておらない。今や、多くの私の読者は、帳簿の締め切りで算定され、目指される、「総利益 (Gesamtgewinn)」, よりしくは「総成果 (Gesamtergebnis)」について考え、これ以上にはもはや全くできない程、ここでは詳細に考えている。だが、すべてがこれで間に合うのではない (Und doch reicht all das nicht aus.)。「事例」を「所業 (Werk)」, つまり、人間の所業 (Menschenwerk) に総括する (zusammenfassen) ことが欠けている。人は、事例からは、生命を与えられ、彼が所属する、活力のある単位 (lebendige Einheit), つまり、個別経済、企業と、経営には到達できないし、すべての経済のこのような活動単位 (Lebenszelle) を構成する、関連 (Beziehung) と法則性 (Gesetzmäßigkeit) にも到達できない。このような有機的組織 (Organismus) は自明のものとして前提にされている¹²⁾。

また、利益 (Gewinn) は、このような活力のある単位、つまり、問題になっている、人間の所業を管理できない (führen)。利益は、人間の所業の成果の分配により生ずる数値 (Größe) であるが、このような所業の最も奥にある法則性とは、直接的には全く関係はない。しかも、利益は、法則性に対する間接的な関連を、商業学者 (Handelwissenschaftler) の目に、明らかにするよりも、ベールで覆ってきた¹³⁾。

コアとして、慎重に取り扱われる事例のこのような収集の回りを、可能な限り法令自体の本文に記載された、法律上の規制、国民経済学の選択された部分 (Teil), 保険論 (Versicherungslehre) と科学技術 (Technologie) の部分を取り囲んでいる。最も多様な断片 (Stück) のこのような収集 (Sammlung) は商業学 (Handelwissenschaften) と呼ばれる¹⁴⁾。

今日、どの程度の発展をこの科学は達成しているのか。今日でも、この科学では、人間の所業、共同体 (Gemeinschaft) である「企業」, 「経営」が、すべてであり、また、その

¹²⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.2.

¹³⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.2-3.

¹⁴⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.3.

すべてである (alles sein, ist ihr auch alles)。貸借対照表とその他のものは、この科学にとり、これらが経営活動 (Betriebsleben) の現象である限りにおいて、意義を有する。今や、〈【著者補足】『組織 向上の道』を見てもらえば、〉このような活動単位の法則性は具体的に示せる。今や、学術調査 (Forschung) はこれまで避けてきたように思われる、問題を解決することができる。これまで解けない混乱 (Knäuel) とみなされてきたものの多くが、今や、研究者と、活力のあふれる関係 (lebensvolle Beziehung) のネットの中で活動している人の目では、解決され、洞察力のある研究 (einsichtige Arbeit) を益々実り豊かにすることができる⁽⁶⁵⁾。

経営経済学者 (Betriebswirtschaftler) は、経済を構成し、その力で経済が活動している、組織単位 (Organisationseinheit) の一つの真ん中で経済を体験している⁽⁶⁶⁾。組織単位から、経営経済学者は、単位から単位に連なる、関連 (Beziehung) を追求し、最小の単位、つまり、組織単位から構成される、より大きな単位、そして最後にまた、最大の単位、すなわち、経済の総体 (All-Einheit) を体験している。各組織単位では、経営経済学者は全体 (Ganze) の真ん中にいる。従って、経営経済学者は、組織単位のすべてにおいて、総体 (All), つまり、世界全体の真ん中にある状態にあるともいえる。このような組織科学の思考過程 (organisationswissenschaftlicher Gedankengang) は、経営経済学の展開を、ここから、従って最小の組織単位で、規定すべきであるし、また規定している⁽⁶⁷⁾。

経営経済学者の研究をこのように見る者は、自然科学者の研究と比較するようになる。つまり、経営経済学者の努力の側面では、全く人間の活動による、すなわち、精神活動による、経済活動の個別単位 (Einzelzelle) の力と法則性の探求に向けられ、〈【著者補足】自然科学者の努力の〉他の側面では、自然の中での最小単位の力と法則性の研究に向けられる。確かに、これは類似した課題 (verwandte Aufgabe) である。しかし、経営経済学者は、彼らの同僚〈【著者補足】自然科学者〉と比べれば、はるかに有利である。同僚は素材の構造を研究しているかもしれないが、どのように形成されるのかについて観察でき、彼が条件を理解すれば、このような形成は自ら (selbst) 起こせる。しかし、決して、彼は、直接的な参加者 (Beteiligter) として、内部からこのような組織化 (Formung) には関与しない。過程は彼の知性 (Intellekt) で理解されるが、彼は、最も内部の人間、最も深い直接的な意識 (Bewußtsein) の経験を、自然に関しては、収集する (sammeln)

(65) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.3.

(66) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.3.; Schönplflug, F.: Das Methodenproblem in der Einzelwirtschaftslehre, Stuttgart 1933. S.209.; 参照。古林喜楽監修・大橋昭一・奥田幸助訳『経営経済学』有斐閣 1970年 186頁

(67) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.4.

ことはできない。自然と人間の活動（Menschenleben）での過程の比較は、直接的な経験と取り替えられないし、既にそれ自体が不適切である（auf Abwege führen）⁽¹⁸⁾。しかし、経営経済学者にはこのような最も内部での直接的な体験が可能である。つまり、最も深い知識（Erkenntnis）と、同時に、合目的な行為（Handeln）へのこのような道（Weg）をたどることができる⁽¹⁹⁾。このようにして、経営経済学は、個別単位を通して関連（Zusammenhang）を見付け、また、関連は個別単位の本質を初めて徹底的に明らかにすることができるようになる⁽²⁰⁾。

このような展開が、われわれのテーマ、つまり、われわれの科学の研究に対して暗示するものは何であるのか。まさか、個別単位の研究を無視するためのアピールでは全くない。だれがこれを求めているのか。しかも、このような個別単位の研究により関連は探求されるべきである。最小の単位から、段階を経て、より大きな単位は認識されるべきである。そこでは、必然的にまた、われわれの体験で最大の単位が完全に解明されるべきである⁽²¹⁾。経営経済学を学ぼうとする者は、関連（Zusammenhang）について研究する者である⁽²²⁾⁽²³⁾。

II

さて、第二番目としては、他の科学が経営経済学の側にある。国民経済学、そして、この後に、法律が特に経営経済学と密接に関連しているといえる。これらは相互に隣接している⁽²⁴⁾。

境界（Grenz）を有することは、共通性（Gemeinsame）を有することを意味している。

(18) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.4-5.

(19) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.5.; Schönplflug, F. 1933. S.223-224.; 参照。古林喜楽監修・大橋昭一・奥田幸助訳1970. 199頁

(20) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.5.

(21) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.5.

(22) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.5.; Schönplflug, F. 1933. S.209.; 参照。古林喜楽監修・大橋昭一・奥田幸助訳1970. 185頁

(23) この点、ニックリッシュは、1911年の『商科大学における商業学の展開』（Die Entwicklung der Handelswissenschaften an den Handelshochschulen, Leipzig 1911.）でも、「商業学の教育の価値は、伝統から——また、若干の専門家（Fachleut）により——簡単に過小評価される。……しかし、学徒（Studierende）の実質上の〈【著者補足】判断材料を集める〉教育ではなくて、形式上の〈【著者補足】体系を保った〉教育が上位に置かれるべきである——商業学でもそうである。彼らに能力を付けることよりも非常に重要なことは、彼らにとっては、現代の経営の複雑なメカニズムを良く見抜けるように、視線を鋭くすることであり、結果として、企業の全体の成果に対して貢献する、個々の要素を認識し、観察し、これら要素を相互作用において追求し、調査し、正しく判断できるように彼らをするのである。そこでは、全く、学徒は、身近に見ている、私経済的な状況から、最善のものを創れる状態になる」（Nicklisch, H.: Die Entwicklung der Handelswissenschaften an den Handelshochschulen, Leipzig 1911. S.27-28.）と述べている（参照。拙稿 2010b. 375頁）。

(24) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.5.

この共通性により、相互の関係 (Beziehung) は活発な交流 (lebensvoller Strom) となる。その際、小さな事例では、単に境界線 (Linie) のみが問題にされるが、むしろ、通常では、このような関係を実現するために、特別に組織される、限界領域が問題にされ、そこから活力のある活動が生まれる。また、これには、防衛のための限界領域内で有機的組織を展開する、安全性のための予防措置 (Sicherheitvorkehrung) も含まれる。『組織向上の道』と、昨年、つまり、1920年に、ハノーバーでの商科大学卒のビジネスマンの会議 (Tagung der Diplom-Kaufmann) で行った、講演の中でも、同様に、このような関連 (Zusammenhang) は随所で注目されている。経営経済学、国民経済学と法律の間で関連は異なるのか。私【著者補足】ニックリッシュはこの問いに次のような答える²⁵⁾。

経営経済学の研究に対して、ある大学会議 (Hochschultagung) で非常に重視されている側から、純粋な経営経済学者 (Betriebswirt) の養成を狙った、提案が行われた。このような学徒は、特殊な学習計画により、一定の学期間、他の科学、特に、他の経済科学から隔離され、これにより、彼らの経営経済的な思考は、他の経済的な思考により、頻繁には影響されなくなる。これに反して、さしあたり、思考 (Denken) は思考であること、(経営経済学にとっても、また、そうであるが、) 人が考えるとき、つまり、彼の中にある知識 (Erkenntnis) が、見付けられ、形成され、関連 (Zusammenhang) を明らかにする、文脈 (Satzfolge) によりあらわされるときには、既に多くのものが獲得されていると主張されるべきである。経営経済的思考は、基本的には、異なる思考、異なる力を有する思考ではないし、異なって構成されるものでも、異なる思考技術 (Denktechnik) によるものでもない。むしろ、同一の思考が、異なる対象、異なる考察事象 (Denksache) を取り扱っている。そして、このような事象 (Sach) が徹底して研究されることが本質である。その際、最も喜ばしい現象として、このような事象が孤立したものでないし、そこから外に出てくるものが全くない、袋小路でもないし、「思考者 (Denkenden)」にとりそれ以上のものはない、限界を手探りで探すことのみができる、未知のものでないことが示される。むしろ、このような事象は、他の事象に対する関係の焦点 (Brennpunkt) として示される。このような焦点は、われわれに本質について説明し、本質について考えることを初めて可能にする²⁶⁾。

これにより、当然に受け取る、拘束 (Fessel) は割れ鍋に閉じ蓋のように取り除かれない。すべてを眺める (begucken) が、調べない (sehen) 者、常に至る所に存在するが、

²⁵⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.5-6.

²⁶⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.6-7.

体験しない者と、このような関連では、われわれはまじめに係わり合わないことは当然である。むしろ、思考を好む者（Denkwillige）と思考者には、認識するに値するものに対して、強く心を向けることが一貫して必要である。しかし、自身で探す者から——初めから除去されるか、隠されるため、最善と最奥のもの（Beste und Tiefste）を隠しておき、彼には多くのことがより認識できないように、このような事態（Ding）をその関連から切り離すことは無分別である⁷⁷⁾。

人は、事態（Ding）に最も強く集中する、能力があるように、教育されるならば、他の事態に注意を向けるため、初めから最も価値のある部分を事態から切り離す必要はない。そうでなければ、最良の意思（Wollen）で自ら創り出した謎を、希望がないのに——つまり、より良い目的、最後には、自己目的、最終目的に役立たないため、暗い袋小路の中で不満足なままで過ごす、不運な暇つぶし（Beschäftigung für Unglückliche）になり、謎は人生がほとんど生きる価値のないものとすべての者に思わせる、実りのない思考訓練で、——解くために頭をひねることになる⁷⁸⁾。

しかし、たとえば、教育訓練ではなくて、むしろ、職務（Beruf）のための特別な訓練で、この職務への参加の直前になお孤立（Isolierung）を考える者は、彼は活動のための準備に努めているとは主張できない。職務での活動前には、人をカゴの中で留まることは許されないし、さもなくば、人はそのカゴの中に居残っているべきである。〈【著者補足】つまり、職務での活動では没交渉は許されないし、職務に参加しなければ、口出しすべきでない。〉これは全くある意味では残酷である。人が強制的に孤立させられることは、常に、ある程度、活動のために役立たないようにされることを意味している⁷⁹⁾。

私〈【著者補足】ニックリッシュ〉は、国民経済学の提案が前提にしているような、国民経済学と経営経済学の間に完全な一致しない対立を認めず、むしろ、両者から全体が形成される、関係を認める。そして、経営経済学の研究では、国民経済学と同様に、このような関係を探ることが必要である。学徒の目を人為的な孤立化により関係から遠ざけることは完全な誤りになるであろう。われわれの時代は、統一体のセンス（Gefühl）で経済活動により道（Weg）を確実に見付ける、人物（Persönlichkeit）を必要としている。片手落ち（Einseitigkeit）により、道での必要な統一を見付けるような、不幸な試みをする、人物は必要ない。懐疑者（Zweifler）、分裂させる者（Gespartene）は、活動の課題に対立するものとしてしばしば見られ、彼らには最も奥（Tiefsten）〈【著者補足】ニックリッ

⁷⁷⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.7.

⁷⁸⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.7.

⁷⁹⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.7-8.

シュが『組織論』では、最高の意識 (Bewußtsein) であり、良心の存在 (Gewißsein) と説明しているもの⁸⁰⁾ では理解されないものの中に、最良の道はたやすく見付けられるに違いない⁸¹⁾。

法律との関係は、立法権である限り、幾分異なるものである。幾つかの例がこれを示すかもしれない。すなわち、商法典は、株式会社では、たとい、その意義が企業で総資本に比例してのみあらわされるとしても、資本金に比例して、損益計算から準備金勘定に記帳すべき金額を規定している⁸²⁾。そして、準備金について、たとえ、準備金が開示された費用賠償 (Kostenersatz) を意味し、経営を維持することにより生ずる、不可避的な損失の振り替え、その原価としての性格 (Kostencharakter) が承認されるべきであるとしても、準備金は純利益から引き出される。経営経済学は、設定された法律に比べて、活動に対して非常に密接な立場にある。そして、このような場合には、設定される法律は経営経済学上での認識に従うべきである。しかも、また、ここに緊密な関係がある。また、ここには、この関係を見習うこと (Absehen) は研究を決して促進しないという、活動の自明の警告 (selbstverständliche Warnung des Lebens) が存在する。三者、つまり、経営経済学、国民経済学と経済法は、分離できないものであり、全体 (Ganze) である⁸³⁾。

経営経済学が、時間序列 (Zeitlang) に注目し、研究で力説することは幾分異なる。経済の単位 (Zelle)、これら単位の活動での法則性についての理論 (Lehre) は、経済科学の研究の共同 (Kombination) において、特殊な有効性を強調する。このため、大学での在学期間 (Studienzeit) の他の時期に対して、いわゆる三者の他の肢体を強調する者は、経済科学の研究の共同をするかもしれない⁸⁴⁾。

われわれのテーマの第二の命題として、このような説明から次のことが生ずる。すなわち、経営経済的な研究能力は存在する必要はない。しかし、共同研究 (Studienkombination) では、経営経済学の強調が切に (dringend) 推奨されるべきである⁸⁵⁾。

⁸⁰⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1922b. S.18.; 参照。大橋昭一著『ドイツ経営共同体論史』中央経済社 1966年 175-176頁; 西村剛稿「ニックリッシュ経営組織論の基本的性格」立命館経営学 第37巻 第3号 1998年 131頁; 拙稿 2010a. 151頁 注⁸⁵⁾

⁸¹⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.8.

⁸²⁾ この点、ニックリッシュは、1912年の『一般商事経営学』以降、1923年の第6版の『経済的経営学』でも、「事業資産に投入されている資本の規模に対して、リスクが直接的な関係を有するならば、準備金により承諾される安全性の程度は、数字上では、準備金が、資本に、自己資本ではなくて、総資本に比例するように投入されることにより、あらわされる」(Nicklisch, H.: Wirtschaftliche Betriebslehre, 6.Aufl., Stuttgart 1923. S.263.; Vgl. Nicklisch, H.: Allgemeine kaufmännische Betriebslehre als Privatwirtschaftslehre des Handels (und der Industrie), Leipzig 1912. S.207.) と主張している。

⁸³⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.8-9.

⁸⁴⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.9.

⁸⁵⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.9-10.

III

そして、第三番目として、問われるのは、人間（Menschen）である。活動する人間（Menschen des Leben）、私〈【著者補足】ニックリッシュ〉がこのように呼ぶとき、活動をマスター（meistern）できるように学ぼうとする人間は、商科大学で教育されるべきであり、自らの活動をマスターすることを、何よりも考慮して、活動する人間である。ビジネスマンの実践が問題になる限り、2つのタイプが区分される。すなわち、

我流（selfmademan）のタイプと

アカデミックに教育されたビジネスマン、つまり、商科大学卒のビジネスマン（Diplom-Kaufmann）のタイプである⁶⁶。

常に、私〈【著者補足】ニックリッシュ〉にとり、最初のタイプの人たちと、ビジネスマンの教育、とくに、ビジネスマンの大学での教育の問題について語ることは、楽しみである。通常、彼らは、大学について多くは知ろうとはせずに、自らの力に固執し、彼らが全く重視しておらない、「退屈な理論（graue Theorie）」を批判する。だが、彼ら自身は、通常、理論上では特殊な能力のある人（Kopf）であり、とにかく、このような理論上の才能により、彼らが現在あるように（was sie sind）なった。（私〈【著者補足】ニックリッシュ〉は、ここでは、戦争と革命の残酷な者（Hyäne）ではなくて、誠実な商人（ehrbare Kaufleute）について語っている。）彼らの理論上での才能は、彼らが、個性（Einzelheit）ではなくて、関連（Zusammenhang）を見付けること、これらが自己の関連に意義を有する限りでのみ、彼らは個性を認めることにある。彼らは関連を体験しており、このような関連を理解しようと努力しており、私〈【著者補足】ニックリッシュ〉にこのような言い換え（diese Wendung）が許されるならば、意欲を持って理解しようとしている。また、彼らは、関連を求め、取り扱おうとしている。そこで、彼らが活動をマスターできるように学び、彼らは、多くはそうであるが、偉大な創造者（großer Gestalter）になれる。通常、彼らの道（Weg）は厳しいもの（beschwerlich）である。というのは、学校教育により大切にされてきた良いもの（guter Teil in den Schoß）を受け取るよりも、自ら自己の活動を徹底して自制して活動することは（Leben von Grund auf selbst zu leben）非常に厳しいからである。しかし、真の学業（richtige Schule）は、彼らに道（Weg）の負

⁶⁶ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.10.

担を軽減し、彼らの行為の結果を更に高め、彼らの活動の中身を本質上で豊かに彼らができるようにするはずである。このため、益々、正しく理解された大学教育が〈【著者補足】求められている〉³⁷⁾。

私が「アカデミックに教育されたビジネスマン (akademischer gebildete Kaufmann)」と呼ぶ、グループでは、ここでは、とにかく、完全なビジネスマンとしての職業研鑽 (Berufsstudium) を経験した、小グループ (Untergruppe)、つまり、商科大学卒のビジネスマンに関心がある。私〈【著者補足】ニックリッシュ〉の読者諸氏は、彼らを知っておられるので、私がここで彼らについてさらに詳細に説明する必要はない。商科大学卒のビジネスマンは自らの真価 (Anerkennung) を発揮すべきである。たとい、彼らが何百という立場で有能であることの実を示していても、今日、なお真価を発揮すべきである。このような行為の真価は彼を助けているが、しかし、このために、商科大学卒のビジネスマンが戦いに簡単に勝利できるのではない。商科大学卒のビジネスマンに対する抵抗は、本質上、2つの側から生ずる。一方では、豪商 (königlicher Kaufmann) から、つまり、最高者 (König) であると意識しているビジネスマン (Kaufmann) からである。彼は、基本的には、教育手段 (Bildungsmittel)、つまり、活動 (Leben) のみを認める。そして、活動の特別に形成された部分として、彼は、旅行 (Reise) を考えている。豪商が主張することは正しい。すなわち、活動のみが真実を形成する。そして、あらゆる他の教育手段は、正確には、この教育手段のための準備手段 (Vorbereitungsmittel) と解される。しかし、これらがうまくいったときのみ、またそうなのである。また、旅行という手段は、全く特殊な形式の体験 (Erleben) 以外の何物でもないが、人が、物事を観察し、その関連を合理的に把握するだけでなく、むしろ、体験し、自身の最も内部での意識 (Bewußtsein) 〈【著者補足】ニックリッシュが『組織論』では、良心の存在 (Gewißsein) と説明しているもの〉で体験として受け取るように、知識と能力とともに、才能で、十分に準備した後で、適用するとき、初めて、成果の多いものとなる³⁸⁾。

これにより、大学での研鑽 (Hochschulstudium) の意義は豪商によってもまた認められるに違いない。しかし、豪商はそうすることを拒絶している。つまり、彼に大学卒業証明書 (Diplom) を呈示する者を軽蔑して見てきた。彼は、彼らを全く理解しようとはせず、彼らにあまり多くを期待しておらない。彼は彼らを拒絶している³⁹⁾。

³⁷⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.10-11.

³⁸⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.11-12.

³⁹⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.12.

ハンブルク（Hamburg）では、商科大学卒のビジネスマンは特に困難に立ち向かってきたに違いないし、豪商に対して正当な評価（Anerkennung）を求める戦いを、今後もおお、行わなければならない⁴⁰。

二番目の現場は、西部、ライン・ウェストファレン（Rheinland-Westfalen）にある。そして、私〈【著者補足】ニックリッシュ〉が考えるに、ライン・ウェストファレンは、至所に、大きな工場（Werk）がある所である。そこでは、「専門家（Spezialist）」に対する欲求（Bedürfnis）が大きい。そこでは、在庫管理を理解している人、計算事務（Kalkulieren）を理解している人、資材の購入を理解している人、契約で「会社を代表できる（firm）」人、納期のコントロール（Terminkontrolle）を理解している人に対する需要（Nachfrage）がある。そして、このような課題に対して有能な人が見付けられたとき、彼らがこのような職位（Posten）に就くことが期待されている。長期に亙って自ら職位を満足に充たしてきた者が、そこにいるときに、他の者が行うことを願うことは障害になり、他の者がそれをしたいたことが、間違いの元（erster Fehler）である⁴¹。

このような有機的組織では商科大学卒のビジネスマンにより何を行えるのか。人は彼らを不信を持って、すべてを理解しているか、全く理解していないか、少し理解できる人として、たぶん、とりあえず使用される、場所（Stelle）では、総ての人生を掛けては、占領し続けられない人として、対応する⁴²。

ここでは、商科大学卒のビジネスマンはかなり（schwer）努力しなければならない。商科大学卒のビジネスマンの組合の多くの会議はこのような事情についての話で充たされている。その内に、また、ここでも、多くの意見（Urteil）は、大学卒業資格を有する者（Diplomiert）のサービス給付（Leistung）により、変更されるか、少なくとも少しは変わる。しかし、ここでもまた、真価（Anerkennung）を認められるための努力（Ringeln）が継続されるべきである⁴³。

商科大学卒のビジネスマンは、二つの現場でのこのような戦いで、勝利が収められるように、確実に努力する（kämpfen）必要がある。しかし、すべては、なければうまくいなくなる、前提である。前提を説明するため、以下では更に詳しく語る⁴⁴。

教養のある人（Gebildete）と教養のない人（Ungebildete）での人間の区別は知られて

⁴⁰ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.12.

⁴¹ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.12-13.

⁴² Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.13.

⁴³ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.13.

⁴⁴ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.13.

いる。境界は、通常、人が所属した学校にあり、クリアーした、進級の数に従って引かれる。その他、合格した、試験の回数に従って引かれるが、教育のこのようなイメージ (Bild) には、まだ、証明書の必要から生ずる、特別な意味 (Farbtin) は少ししか付けられておられない。「輝やかな証明書」に対する見切り (Wendung von “den glanzenden Zeugnissen”) は、多くの人 (Gehirn) にとり、ほとんど周知のことである。このような境界線は、それが引かれる基準が、上辺のものであるから、非常に確実に引かれる⁴⁵⁾。

しかし、内部では他の様相もありえる。私 <【著者補足】ニックリッシュ> には、意識 (Bewußtsein) では成長せず、体験できない、このため、物事 (Ding) に対するこの意識の関係 (Verhältnis) を、明るみに出すよりも、曖昧にする、概念で一杯にされた意識が考えられる。私には、再生産の法則 (Reproduktionsgesetz) によると、機械的な関連で、内部の関連はない、あらゆる個別性で一杯にされた、意識が考えられるが、このような意識では物事の間での正しい道を理解できない。ここでは、<【著者補足】目立った個別性がある> シラカバが、生活共同体 (Lebengemeinschaft) である、<【著者補足】実体である> 森を隠している。私 <【著者補足】ニックリッシュ> には、このような意識が、その内容が生活と世界での関連に矛盾しているため、意義のない、「概念」の完全な空白 (ganzer Park) を含んでいることを思い浮かべられる。しかも、本当にしばしば、活動 (Leben) が、彼らの概念に一致しないため、異なるべきであるという要求を、活動に対してするような人がいる⁴⁶⁾。

反面、特別な学校での教育なしに、活動の法則性 (Gesetzmäßigkeit des Lebens) を認識している、人も見付けられるが、これは、本性の意識 (unbewaffneten Bewußsein) で可能であり、活動を深い理性 (Verständnis) をもって構成する (gestalten) 限りにおいてである。私 <【著者補足】ニックリッシュ> は、このような人を、たとい、全く学校での教育を受けておらなくても、教養のある人とみなす。活動の関連を隠し、秘密にする、物事により意識を充たしている人は、たとい、高等教育機関に通っていたとしても、教養のない人もしくは半端な教養のある人 (Halbgebildete) と多分みなされるべきである⁴⁷⁾⁴⁸⁾。

45) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.13-14.

46) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.14.

47) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.14.

48) この点、ニックリッシュは、安易な体験、つまり、実習に対して、『商科大学における商業学の展開』では、大学教育で提供される思考の機会について、『『定義する思考 (definierendes Denken)』と『論理的な思考 (logisches Denken)』のための機会、具体的には、特定の事実の状況 (Tatsachenbestand) を確定し、言葉で書き留め、正確に記述するという必要性による『定義する思考』のための機会と、観察された過程と状態に基づく矛盾のない結論、つまり、観察と経験が設定する、前提から結論 (Folgensatz) への正しい演繹の必要性による『論理的な思考』のための機会を提供する』(Nicklisch, H. 1911. S.27.) と述べている (参照。拙稿 2010b. 374-375頁)。

商科大学卒のビジネスマンは、この意味で、教養のある人とみなされるならば、立派に努力をしている。しかし、彼は、これに妥当するならば、理解力（Verstand）により探求する必要があるだけでなく、むしろまた、意思（Wollen）の母であり、かつ、誕生の源である、彼の意識の最も奥の内部により、これを行うべきである。学徒（Studieren）〈【著者補足】という名称〉は、「学徒は活動し、学徒になる体験をする（Das Studium leben und das Zu-Studierende erleben）」ことを明示しているに違いない。このようにして、学徒は人格の価値（Persönlichkeitwert）により形成される。このようにして、学徒は、また、自らの力による行動様式（Männern）と、商科大学卒のビジネスマンの間での隙間（Kluft）を解消しようと努める。関連を体験し、活動することで、能力は発達し、また、能力は、関連を体験し、活動することを強化する。そこでは、また、学徒の理性（Verständnis）は、活動による教育のための準備として、個々の行動様式を完全にはっきりと思い浮かべさせるかもしれない。その場合、自ら（selbst）このような処置（Mittel）を操作（bedienen）できない、そして、商科大学卒の商人（Diplom-Kaufleute）は、非常に困難な状況で活動を構成し（gestalten）、すべて控えめに対応する、行動様式を好むかもしれないという、後悔（Bedauern）に学徒は目覚めるかもしれない⁴⁹⁾。

経営経済学の学徒にとり、知性（Intellekt）でのみ学ばずに、むしろ、体験しろという、要求（Forderung）には特殊な意義がある⁵⁰⁾⁵¹⁾。

IV

さて、簡単に、第四番目で、最後のものについて問う。人は、何事でも、それを実感し（erfassen）、受け入れられる（aufnehmen）ときにのみ、体験できる（erleben）。このための前提は、それを明らかにすることができることが前提である。だれかが、ビジネスマンの技術（kaufmännische Technik）に支配されることなしに、経営経済上での関連を明らかにしようとする。〈【著者補足】しかし、このようなことは不可能である。〉ここに

49) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.14-15.

50) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.15.; Schönpluf, F. 1933. S.208-209.; 参照。大橋昭一・奥田幸助訳 1970. 185頁

51) この点、ニックリッシュは、安易な体験、つまり、実習に対して、『商科大学における商業学の展開』では、「これら実習に対して過大な時間が使われるならば、〈【著者補足】たとえば、企業での体験学習と称して、無目的に、長期に互って、現場での作業労働を繰り返すならば、〉すぐに、軽率にあるものを過度に強調した実質上の〈【著者補足】判断材料を集める〉教育と、ある種の習熟のための訓練（Ausbildung）をもたらし、大学の講義の主要目標のためには極僅かな時間しか残されない」（Nicklisch, H. 1911. S.29-30.）と述べている（参照。拙稿 2010b. 376頁）。

は、また、純粋な国民経済学者、純粋な法律家や、純粋な技師にとっても、経営経済上での関連について正しいイメージを形成するという、大きな困難がある。経営経済学の領域に従事しようとする、総ての人は、ビジネスマンの技術を自らの力で獲得することは許されておられない。そうであれば、彼はその用語 (Sprache) を知らないし、その兆候 (Zeichen) の意義を判読することができないのに、どのようにして、彼は、企業の経営経済上での記録 (Archive)、ビジネスの帳簿 (Geschäftsbuch) と、ビジネスでの書類 (Geschäftspapiere) の内容、自らの経営活動と、経営活動について公開されたものを外部のみから理解しようとするのであろうか⁵²⁾。

しかし、経営経済学の学徒にとり、とにかくビジネスマンの技術に支配されながら学べという、この第四番目で最後の命題は正に妥当する⁵⁴⁾。

おわりに、われわれの説明が到達した、4つの命題を纏めておく。すなわち、

1. 関連 (Zusammenhang) を研究すべきである。
2. 経営経済学のための共同研究では、他の科学よりも経営経済学を強調すべきである。
3. 経営経済学の学徒は体験すべきである。
4. とにかく、ビジネスマンの技術に支配されながら、学ぶべきである。

このように経営経済学を研究する者は、経済の再構築での自らの役割を果たすことに、より良く従事できるであろう⁵⁵⁾。

ま と め

本稿では、1921年に初版が、1925年に改訂版が出された、小冊子『経営経済学の研究』(Vom Studium der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1921.) を検討した。検討の結果、同著は、ニックリッシュが主張する、商科大学卒のビジネスマン (Diplom-Kaufmann) 〈われわれは、現在の経営学部と商学部の卒業者に相当する者とみなすが、〉の経営活動に対する取り組み方の指針を示唆するものであり、4つの命題として、卒業生に対する抱負

⁵²⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.15-16.

⁵³⁾ この点、ニックリッシュは、『商科大学における商業学の展開』では「ドイツの単科大学での商業学の擁護者がビジネスマンの実践と完全に意見が一致していること、ビジネスマンの慣習 (kaufmännische Routine) 【著者補足】現場の知識が学校の腰掛けに座ったままでは、獲得できないこと、学校、特に単科大学が、ビジネスマンの研修期間 (kaufmännische Lehrzeit) を補充できないことが指摘されるべきである。この研修期間は、完全な時間上での延長でなければ、補充されない」(Nicklisch, H. 1911. S.28-29.) と述べている (参照。拙稿 2010b. 375頁)。

⁵⁴⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.16.

⁵⁵⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.16.

を纏めている。ニックリッシュは、1926年に、小冊子『ドイツにおける経営経済学の研究』（Das Studium der Betriebswirtschaftslehre in Deutschland, Charlottenberg, 1926.）を出版し、今日の大学案内のガイドブックのように、各商科大学の特徴と有名教授の紹介をしている。われわれは、商科大学のブームが起こっていたと推察しているが、反面、1927年にドイツでは世界恐慌よりも早く不況期を迎えるが、過熱気味の景気と、実務経験重視の成り行き的な経営活動、そして、商科大学の卒業者の将来に対して不安を抱えていたのではないかと考える。ともあれ、われわれは、ここでは、ニックリッシュが掲げる4つの命題について確認しておきたい。

まず、今日でも、ケーススタディ、いわゆる、事例研究が盛んに行われているが、当時（1921年）のドイツの経営経済学（Betriebswirtschaftslehre）でも、「事例」（Fall）、つまり、個別事例（Einzelfall）が問題にされ、従来に比べた進歩が答えとして見付けられ、「どのように処理できるのか」という問いについて答えられ、一連の処方箋（Rezept）を検討して、この内一つが最善のものとして推薦されていた。しかし、ニックリッシュは、このように処理された個別事例を集めても、経営学の問題解決にはならないと考え、『事例』を『所業』、つまり、人間の所業（Menschenwerk）にまで総括（Zusammenfassung）することが不足している。人は、事例からは、生命を与えられ、彼が所属する、活力のある単位（lebendige Einheit）、つまり、個別経済、企業と、経営に到達できないし、すべての経済の活動単位（Lebenszelle）を構成する、関係（Beziehung）と法則性（Gesetzmäßigkeit）には到達できない。このような有機的組織（Organismus）は自明のものとして前提にされている⁵⁶と主張した。つまり、ニックリッシュは、自然科学とは異なり、社会科学である経営学は、人の欲求、意識に基づく関連を解明する必要があるとして、彼は、第一命題として「経営経済学を学ぼうとする者は、関連について研究する者である」⁵⁷と宣言している。

次に、今日でも、一部の経済学者には、経営学に対して「金儲け論」というような非難があるが、当時（1921年）のニックリッシュでは、経営経済学の存在の意義は主張するが、経済学に対する対立姿勢は解消されている。彼は、「思考は思考であること、（経営経済学にとっても、また、そうであるが、）人が考えるとき、つまり、彼の中にある知識が、見付けられ、形成され、関係を明らかにする、文脈（Satzfolg）によりあらわされるときに

⁵⁶ Nicklisch, H. 1921. S.2.

⁵⁷ Nicklisch, H. 1921. S.5.; Vgl. Schönplflug, F. 1933. S.209.; 参照。大橋昭一・奥田幸助訳 1970 185頁

は、既に多くのものが獲得されていることが主張されるべきである。経営経済的思考は、基本的には、異なる思考、異なる力を有する思考ではないし、異なって構成されるものでも、異なる思考技術によるものでもない。むしろ、同一の思考が、異なる対象、異なる考察事象を取り扱っている。そして、このような事象 (Sach) が徹底して調査されることが本質である⁵⁸⁾ という見解の下で、「私〈【著者補足】ニックリッシュ〉は、国民経済学の提案が前提にしているような、国民経済学と経営経済学の間には完全な一致しない対立を認めず、むしろ、両者から全体が形成される、関係を認める。そして、経営経済学の研究では、国民経済学と同様に、このような関係を探ることが必要である。学徒の目を人為的な孤立化により関係から遠ざけることは完全な誤りになるであろう。われわれの時代は、統一体のセンス (Gefühl) で経済活動により道 (Weg) を確実に見付ける、人物 (Persönlichkeit) を必要としている。片手落ち (Einseitigkeit) により、道での必要な統一を見付けるような、不幸な試みをする、人物は必要ない⁵⁹⁾ と主張した。つまり、ニックリッシュにとって、「経営経済学、国民経済学と経済法は、分離できないものであり、全体 (Ganzes) である」⁶⁰⁾。しかし、失業、倒産などの問題を解決するためには、先ず、発生している現場である、企業、経営に目を向ける必要があることから、ニックリッシュは、第二の命題として、「経営経済的な研究能力は存在する必要はない。しかし、共同研究 (Studienkombination) では、経営経済学の強調は切に推奨されるべきである」⁶¹⁾ と宣言している。

さらに、ニックリッシュは、「活動する人間 (Menschen des Leben), 私〈【著者補足】ニックリッシュ〉がこのように呼ぶとき、活動をマスター (meistern) できるように学ぼうとする人間は、商科大学で教育されるべきであり、自らの活動をマスターすることを、何よりも考慮して、活動をする人間である⁶²⁾ という見解の下で、ビジネスマンの実践から、我流 (selfmademan) のタイプとアカデミックに教育されたビジネスマン、つまり、商科大学卒のビジネスマン (Diplom-Kaufmann) に区別し⁶³⁾、前者の我流のビジネスマンでも、理論上での才能により、個別性 (Einzelheit) ではなくて、関連 (Zusammenhang) を見付けることはあるが⁶⁴⁾、後者の商学士のビジネスマンは、本質上、一方では、たとえば、ハンブルクでのように、豪商 (königlicher Kaufmann) から、大学卒業証明書を呈

58) Nicklisch, H. 1921. S.6.

59) Nicklisch, H. 1921. S.8.

60) Nicklisch, H. 1921. S.9.

61) Nicklisch, H. 1921. S.9-10.

62) Nicklisch, H. 1921. S.10.

63) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.10.

64) Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.10.

示する者として軽蔑され、全く理解しようとはされず、あまり多くを期待されておられないし、他方で、たとえば、西部、ライン・ウェストファレンでのように、「専門家 (Spezialist)」に対する欲求 (Bedürfnis)、つまり、在庫管理、計算事務 (Kalkulieren)、資材の購入、納期のコントロール (Terminkontrolle) を理解していたり、契約で「会社を代表できる (firm)」人に対する需要 (Nachfrage) があるが、不信を持って、たぶん、とりあえず使用される、場所 (Stelle) では、総ての人生を掛けては、占領し続けられない人として、対応されているとみなしている⁶⁵⁾。

このため、商学士のビジネスマンはかなり (schwer) 努力しなければならないが、ニックリッシュは、「学徒 (Studieren) <【著者補足】という名称> は、『学徒は活動し、学徒になる体験をする (Das Studium leben und das Zu-Studierende erleben)』こと」を明示しているように、関連を体験し、活動することにより、能力を発達させなければならないことから⁶⁶⁾、第三の命題として、「経営経済学の学徒にとり、知性 (Intellekt) でのみ学ばずに、むしろ、体験しろという、要求 (Forderung) は特殊な意義がある」⁶⁷⁾と宣言している。

そして、今日でも、実習や体験学習の重要性が主張されているが、ニックリッシュは、「人は、何事でも、それを実感し (erfassen)、受け入れられる (aufnehmen) ときののみ、体験できる (erleben)。このための前提は、それを明らかにすることができることが前提である」⁶⁸⁾という見解の下で、「経営経済学の領域に従事しようとする、総ての人は、ビジネスマンの技術を自らの力で獲得することは許されておられない」⁶⁹⁾と主張する。このようなことを試みても、「彼はその用語 (Sprache) を知らないし、その兆候 (Zeichen) の意義を判読することができない」⁷⁰⁾から、「経営経済学の学徒にとり、とにかくビジネスマンの技術に支配されながら学ぶこと」⁷¹⁾を推薦している。

おわりに、われわれは、1911年に出版された、『商科大学における商業学の展開』の中で、商科大学、今日の「経営学部」や「商学部」の教育の使命についての彼の見解について既に検討した。本稿で検討した、小冊子『経営経済学の研究』は、この見解に基づいて作成されているが、今日のわが国でも彼の見解は妥当なものであるとみなし、ここでも、

⁶⁵⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.12-13.

⁶⁶⁾ Vgl. Nicklisch, H. 1921. S.15.

⁶⁷⁾ Nicklisch, H. 1921. S.15.

⁶⁸⁾ Nicklisch, H. 1921. S.15.

⁶⁹⁾ Nicklisch, H. 1921. S.16.

⁷⁰⁾ Nicklisch, H. 1921. S.16.

⁷¹⁾ Nicklisch, H. 1921. S.16.

記載しておく。すなわち、「学徒（Studierende）の実質上の〈【著者補足】判断材料を集める〉教育ではなくて、形式上の〈【著者補足】体系を保った〉教育が上位に置かれるべきである——商業学〈【著者補足】今日の経営学，商学〉でもそうである。彼らに〈【著者補足】現場での〉能力を付けることよりも非常に重要なことは、彼らにとっては、現代の経営の複雑なメカニズムを良く見抜けるように、視線を鋭くすることであり、結果として、企業の全体の成果に対して貢献する、個々の要素を認識し、観察し、これら要素を相互作用において追求し、調査し、正しく判断できるように彼らをする事である。そこでは、全く、学徒は、身近に見ている、私経済的な状況から、最善のものを創れる状態になる」⁷²⁾。

なお、『一般商事経営学』で見られた、国民経済学に対する対立した姿勢は弱まり⁷³⁾、小冊子『経営経済学の研究』には、たとえば、「三者、つまり、経営経済学、国民経済学と経済法は、分離できないものであり、全体（Ganze）である」⁷⁴⁾と主張するように、法律を含めた、国民経済学とのトライアングルで、経済事象、とくに、企業と経営に係わる事象を検討するという姿勢が、認められる点にも、われわれは注目している。

参 考 文 献

- 1) Nicklisch, H.: Handelsbilanz und Wirtschaftsbilanz, national ökonomische Studien, Magdeburg 1903.
- 2) Nicklisch, H.: Kartellbetrieb, Leipzig 1909.
- 3) Nicklisch, H.: Die Entwicklung der Handelswissenschaften an den Handelshochschulen, Leipzig 1911.
- 4) Nicklisch, H.: Allgemeine kaufmännische Betriebslehre als Privatwirtschaftslehre des Handels (und der Industrie), Leipzig 1912.
- 5) Nicklisch, H.: Rede über Egoismus und Pflichtgefühl, gehalten von H. Nicklisch, Mannheim, Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis, Heft 5, August 1915, 8.Jg., 1915. (森 哲彦訳「ニックリッシュ 利己心と義務感」『研究紀要』(名古屋市立女子短期大学) 1996年; 渡辺 朗訳「利己主義と義務感」(大橋昭一編著・渡辺 朗監訳『ニックリッシュの経営学』同文館 1996年)
- 6) Nicklisch, H.: Der Diplom-Handelslehrer, Stuttgart 1920.
- 7) Nicklisch, H.: Vom Studium der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1921.
- 8) Nicklisch, H.: Wirtschaftliche Betriebslehre, 5.Aufl., Stuttgart 1922.
- 9) Nicklisch H. (1922b): Der Weg aufwärts! Organisation, Versuch einer Grundlegung, 2.Aufl., Stuttgart 1922. (鈴木辰治訳『組織 向上の道』未来社 1975年)
- 10) Nicklisch, H.: Wirtschaftliche Betriebslehre, 6.Aufl., Stuttgart 1923.

⁷²⁾ Nicklisch, H. 1911. S.27-28.

⁷³⁾ 参照。田島莊幸著『ドイツ経営学の成立』森山書店 1973年 74-78頁; 岡田昌也著『経営経済学の生成』森山書店 1977年 319頁; 拙稿「ニックリッシュの『一般商事経営学』の研究ノート」関西学院商学研究 第10号 1980年 57-58頁

⁷⁴⁾ Nicklisch, H. 1921. S.9.

ニッケリッシュの『経営経済学の研究』についての一考察（牧浦）

- 11) Nicklisch, H.: Das Studium der Betriebswirtschaftslehre in Deutschland, Charlottenberg, 1926.
- 12) Nicklisch H.: Grundfragen für die Betriebswirtschaft, Stuttgart 1928. (木村喜一郎訳『経営経済原理』文雅堂 1930年)
- 13) Nicklisch, H.: Die Betriebswirtschaft, Stuttgart 1929/1932.
- 14) Schönflug, F.: Das Methodenproblem in der Einzelwirtschaftslehre, Stuttgart 1933. (参照。古林喜楽監修・大橋昭一・奥田幸助訳『経営経済学』有斐閣 1970年)
- 15) 市原季一著『ニッケリッシュ』同文館 1982年
- 16) 大橋昭一著『ドイツ経営共同体論史』中央経済社 1966年
- 17) 岡田昌也著『経営経済学の生成』森山書店 1977年
- 18) 田島荘幸著『ドイツ経営学の成立』森山書店 1973年
- 19) 拙稿「ニッケリッシュの『カルテル経営論』についての一考察」関西学院商学研究 第6号 1977年
- 20) 拙稿「ニッケリッシュの『一般商事経営学』の研究ノート」関西学院商学研究 第10号 1980年
- 21) 拙稿「ニッケリッシュの『経営経済原理』についての一考察」近畿大学商経学叢 第56巻 第2号 2009年
- 22) 拙稿「ニッケリッシュの『組織論』についての一考察」近畿大学商経学叢 第57巻 第1号 2010年 (2010a)
- 23) 拙稿「ニッケリッシュによる『商科大学での商業学の展開』についての一考察」近畿大学商経学叢 第57巻 第2号 2010年 (2010b)
- 24) 西村 剛稿「ニッケリッシュ経営組織論の基本的性格」立命館経営学 第37巻 第3号 1998年
- 25) 吉田和夫著『ドイツの経営学』同文館 1995年